

## 臨済宗天龍寺派デジタルアーカイブ ～臨済宗の寺社と文化財デジタルアーカイブの構成～



荒木久貴・久世均（岐阜女子大学）

### 1. 天龍寺の建立からその歴史

天龍寺は、暦応2年（1339）に建てられた臨済宗の寺で、後醍醐天皇の冥福を祈ることを目的として建てられた。寺の建立をするにあたって、中国の元に天龍寺船を派遣したことも有名である。後醍醐天皇ゆかりの亀山の地を選ぶとともに、暦応資聖禅寺と当初は、称されたが、延暦寺や興福寺の強訴にもより、天龍資聖禅寺に改称された。

開山は夢窓礎石で、この寺は、臨済宗天龍寺派の中心となった。至徳3年（1386）には、京都五山の第1位に指定されて、経済的にも巨大な力を持つことになった。ちなみに、亀山の地とは、亀山天皇の大覚寺統ゆかりの地で、後醍醐天皇の子である世良親王の遺領であった。元々は、禅寺が建立



図1 天龍寺

され、元翁本元を開山としていたが、後醍醐天皇の死去により、天龍寺の建立場所として、選ばれたのである。禅寺の後、後醍醐天皇は、夢窓礎石を招来して臨川寺を建立させている。後醍醐天皇も生前は、この亀山の地でよく過ごされたといわれている。そのために、寺の建立には、この場所が選ばれた。

天龍寺は、臨済宗発展の中心地となるとともに、足利政権からの土地の寄進も進み、莫大な経済力を持つことになった。その経済力も背景に、五山文化と呼ばれる文化の興隆にも貢献している。加えて、年々、天龍寺に住む僧の数も増え、天龍寺境内に多くの塔頭を建てることとなる。（宝蔵

院、寿寧院、妙智院など。)このことは、天龍寺文書でも、その天龍寺の境内の広さを絵図で確認することができる。

初代住持(住職)は、夢窓礎石であったが、夢窓の死後、甥の春屋妙葩が2代目住持となる。2代までは、肉親で住持が続くが、3代目以降は、外部からの住持が就任されるようになる。夢窓礎石の遺言により、天龍寺の住持は、臨済宗から幅広く能力のあるものを招来するよういわれたからである。しかしながら、応仁の乱や禁門の変などの戦乱を経て、寺勢は、衰えていくことになる。現在も、臨済宗天龍寺派の大本山として続く。平成6年(1994)にユネスコの世界文化遺産に登録され、海外からも観光客がやってくる人気の寺になっている。

## 2. 臨済宗天龍寺派デジタルアーカイブ

天龍寺文書については、1978年と1979年に京都府教育委員会によって古文書調査が行われ、

『天龍寺文書目録』としてまとめられている。その後、1987年から1991年にかけて、京都府立総合資料館により再調査が行われ、追加で、『天龍寺古文書目録補遺』『天龍寺古文書目録補遺II』『天龍寺古文書目録補遺III』が作成されている。

また、天龍寺文書は、京都大学文学部古文書室や東京大学史料編纂所でも影写本が作成

されている。天龍寺は、平成6年(1994)に世界遺産に認定登録された。

それに伴って、海外からの拝観者も増加し、寺院としての知名度は高まった。しかしながら、一般の人々が天龍寺文書についてあまり知られていない。古文書は、人々が生きてきた証を示す大切な資料である。寺院に含めて、天龍寺文書を一般の人々が理解し、活用することが重要である。ところが、天龍寺文書の扱いに注意が必要なこともあるためか、原田の業績以降も天龍寺文書の活用および論文での使用は進んでいない。そのために、本研究では、図3のように天龍寺文書を総合的に構成し「臨済宗の寺社と文化財デジタルアーカイブ」としてデジタルアーカイブを行った。

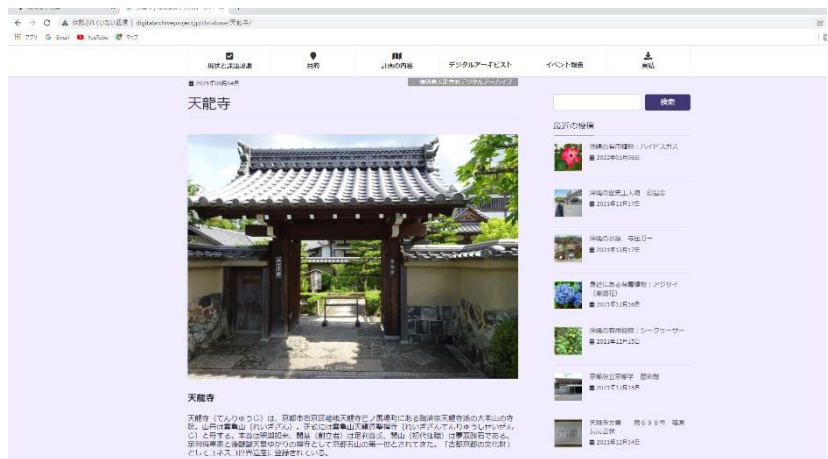


図2 臨済宗天龍寺派デジタルアーカイブ



図3 天龍寺文書のデジタルアーカイブ